第四章．検証会

１、概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・９９
２、浜田会場・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１００
３、松江会場・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１０２
４、出雲会場・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１０６
５、参加者アンケート意見・・・・・・・・・・・・・・・・１１０

第四章、検証会

１．概要

①浜田会場 ⑴浜田合同庁舎 中会議室⑵

日時　9月1日（金）　１３：３０～１６：００

日程　●協働事例発表・検証・意見交換

コーディネーター：NPO 法人ひろしまね理事長　安藤周治

事例発表①「さくらえ自警ネットワーク構築事業」

実 施 団 体：NPO 法人　結まーるプラス

事業担当課：江津警察署生活安全刑事課

②「津和野ノスタルジー」

実 施 団 体：TSP (Tsuwano Screen Project)

事業担当課：文化国際課

②松江会場 ⑴職員会館 多目的ホール⑵

日時　9月4日（月）　１３：３０～１６：００

日程　●協働事例発表・検証・意見交換

コーディネーター：NPO 法人ひろしまね理事長　安藤周治

事例発表①出雲そばを活かした地域の活性化事業

実 施 団 体：NPO 法人　まつえ・まちづくり塾

事業担当課：観光振興課

②新出雲市「ひろがれボランティア」の輪事業

実 施 団 体：出雲市総合ボランティアセンター運営委員会

事業担当課：環境生活総務課

③出雲会場 ⑴出雲合同庁舎 ６０１会議室⑵

日時　9月6日（水）　１３：３０～１６：００

日程　●協働事例発表・検証・意見交換

コーディネーター：NPO 法人ひろしまね理事長　安藤周治

事例発表①「出東地域安心安全ステーション」

実 施 団 体：出東地域安心安全ステーション

事業担当課：警察本部生活安全企画課

②「だれんもで　古代出雲神話村づくり」

実 施 団 体：大社デザイン

事業担当課：古代出雲歴史博物館

２．浜田会場

（１）事例発表

①「さくらえ自警ネットワーク構築事業」（事業報告　P82）

【実施団体：ＮＰＯ法人　結まーるプラス】

- 「自警ネット･チームさくらえ」の発足で、地域の安心安全に対する関心が高まり、自分たちの地域は自分たちで守るという機運が醸成された。
- 島根県発の「過疎地版ガーディアンエンジェルス」として、全国に波及させたい。

【事業担当課：江津警察署生活安全刑事課】

- 防犯ボランティア団体の動きが具体的になってきた。
- 地域住民の防犯の意識が高まった。
- 防犯件数が減少した。

②「津和野ノスタルジー」（事業報告　P26）

【実施団体：ＴＳＰ（Tsuwano Screen Project)）

- 「楽しめ」というキーワードで活動している。自分たちが楽しめるイベントは自然に賛同者も増えてきている。
- 協働する内容より、協働を通じて交流することが今後の発展につながると思っている。

【事業担当課：文化国際課】

- 事業担当課は、協働する内容、現場と行政をつなぐことが役割ではないか。

（２）事例発表についての質疑・意見

①事業名「さくらえ自警ネットワーク構築事業」について

（質問）「自警ネット･チームさくらえ」として100名集めたご苦労は？

（回答）民生委員、小学校に協力を要請し、また、既存の組織を利用した。

（質問）「チームさくらえ」は、将来5人組といったような監視し合う方向に行くのではないか？

（回答）テーマが明快であるため、そのような心配はしていない。

（意見）河部さんのお話には、温かいまなざしが成果を結んだと大変参考になった。

②事業名「津和野ノスタルジー」について

（質問）TSP の事業で、写真は個人にまつわるものであるが、個人情報保護についてどうクリアされたのか？

（回答）個人個人に許可をもらうしかない。

（意見）津和野のＴＳＰの事例を浜田にも当てはめて、浜田で活性出来たらと思う。

（３）県民との協働による島根づくり事業についての質疑・意見

（意見）

●「県民との協働による島根づくり事業」には4つの意義がある。

- 民間で生まれた公共として、地域を励ますこの事業は新しい試みである。
- 様々な課が関わる全庁的な体制である。
- 行政が一方的に採択したのではなく、第3者の評価を入れて採択した。
- 検証会で事業の追体験を行う。

●自治体職員は、一人一人が工夫して地域の人を励まし、創意性を発揮して地域へ働きかけていく知恵がないといけない。行政の文化、体質が変われば、県民の発想も変わる。

●アンケート調査結果は県全域で共有し、全国にも情報発信すべきである。

●協働事業は、補助金事業とは異なりそれぞれの地域が立ち上がっていく大変意味のある事業である。地域の潜在力をどう導引して、掘り起こして元気にしていくかという点で今日の話は印象的であった。

３．松江会場

（１）事例発表

①「出雲そばを活かした地域の活性化事業」（事業報告　P14）

【実施団体：ＮＰＯ法人　まつえ・まちづくり塾】

- 出雲そばの知名度アップになり、様々な主体を結びつけるきっかけとなった。
- 役割の明確化、進行管理、継続性について課題が残った。
- 何が協働事業なのか、事例を重ねていく中で島根らしい協働事業が出来ればいい。

【事業担当課：観光振興課】

- 成果を今後いかに活用していくかが大きな課題である。出来たツールうまく使って観光振興を図っていきたい。
- 助成事業に近かったかもしれない。今後は事業設計から関わることが必要であり、成熟して勉強していく必要がある。
- 受け地着地型観光、地域の NPO は大きな存在である。

②『新出雲市「ひろがれボランティアの輪」事業』（事業報告　P64）

【実施団体：出雲市総合ボランティアセンター運営委員会】

- 広域行政が必要であり、協働事業を行って良かった。
- 市、県、社協間で随分論争したが、結果的にそれが功を奏した。
- 協働のやり方は色々ある。県も理解が深まっている。

【事業担当課：環境生活総務課】

- マニュアル作成検討委員会へ参加し、また市民会議へはパネリストとして参加した。

（２）事例発表についての質疑・意見

①事業名「出雲そばを活かした地域の活性化事業」について

（質問）出雲そばの文化性とは？

（回答）地域に浸透しつつ歴史を持っている。(生活浸透度が高い。そのものではなくストーリー)

（質問）「出雲そば通」の印刷費用は？　冊子の中身が写真ではなくイラストなのは費用の問題か？

（回答）印刷費用は50～60万円。写真を使わなかったのは、絵が奥深いイメージが伝わるだろうということで、敢えてイラストにこだわった。

（質問）「出雲そば通」の冊子を、飲食店組合(業界)ではなくＮＰＯ法人が出版するということは、そば店経営者にはすごいプレゼンテーションになる。しかし、そば店自体の動きがないと全国発信が出来ないのではないか。その後のそば店の反応と、そば店の意識の変化を聞きたい。

（回答） そば店の歴史は古いが、地区組合の横の連携への取り組みが始まったのは最近のことである。そういう中で部外者である我々が、全体に串を通すような冊子を作成することで情報交換の場となればと思っての提案であった。地区組合に非常に喜ばれた。そば店には販売してもらうことで協力いただきたいと考えた。持ちつ持たれつの良い関係が出来たと思っている。

（意見） うどんもそばも打つが、そばの方が難しい様に思う。U ターンをしてみて、出雲そばの良さを知ったので、もっと多くの人に知ってほしい。

②事業名『新出雲市「ひろがれボランティアの輪」事業』について

（質問） 出雲市には自主防災隊があるのか？　あれば、自主防災隊とボランティアセンターの関わりはどうか。自治会としての動きとボランティアセンターとの関わりはどうか。

（回答） 旧出雲市内にはないが、新出雲市内には支所単位で自主防災隊がある。今は接点はないが、今後、旧市内はコミュニティセンター単位、新市内は支所単位で勉強会を開催していきたい。

自治会はリーダーによって動きに随分差が出た。日頃から自治会組織と話し合いをして、いい関係をつくっておく必要がある。

（意見） 災害ボランティアセンターの活動について、是非記録に留めていただきたい。ネットで見ることが出来るようにしてほしい。

（意見） 7月災害時にボランティアとして参加したが、とてもスムースに運営されていてすばらしいと思った。

（意見） ボランティアセンターの話がタイムリーな話題だったので、質問が災害に偏ってしまったと思うが、マニュアルや参加方法について聴きたかった。まず、参加･体験しないと頭で理解できない。

（３）県民との協働による島根づくり事業についての質疑・意見

（質問） 対象経費（特に人件費）の制約を緩和してもらうと良い。

（回答） 経費については検討していきたいが、いろいろな条件があり、要求どおりにはならないことをご了解いただきたい。この事業をきっかけとし、次に結びつけてほしいと考えている。

（意見）

●検証をどういうふうにみるかという点では、「協働としてみる」「事業自体をみる」という、ふたつの見方があるが、今回は、事業についての関心の向きが多かったように思う。裏をかえせば協働は掴み所がないということがいえるだろう。

協働は手段に過ぎないので、その事業が当初掲げてきた目標をどれだけ達成できたかということが最初問われるべきであろう。その点では今回の事業は問題なかったのではないか。

●まつえ･まちづくり塾については、行政は見守っていただけということであったが、もう少しアイディアを出し合うところがあっても良かった。ただし、出雲学講座で参考書として使用するということである。とかく、協働は、「ひざを突き合わせていっしょに議論する」「お金を出し合う」「汗をかきあう」という直接的に関係するところだけ考えられがちであるが、参考書として使うことは、結果的にまちづくり塾の目標としている「そばをメジャーに」「文化性を広める」ことにつながり、結果として協働の効果が上がるといえるので、そういう形の協働も有るのではないかと思う。

●ＮＰＯと行政の協働のあり方検討会の報告書にも強調されているように、協働は結果だけではない。まつえ･まちづくり塾の発表のなかで、協働の効果のひとつとして「さまざまな主体を結びつける」ということをあげられたが、そのことは、事業を実施していくなかでのプロセスも重要であるということがいえる。

●出雲災害ボランティアセンターの運営は非常にスムースであった。災害マニュアルの作成段階で、関係団体と行政が徹底的に議論したということが印象的であった。協働には対話と信頼関係に基づいた合意が必要であり、それがあったことが今回のスムースな運営につながったと思う。

島根県
環境生活
総務課
川本 眞徳

４．出雲会場

（１）事例発表

①「出東地域安心安全ステーション」（事業報告　P80）

【実施団体：出東地域安心安全ステーション】

- 地域安全マップ作成をとおして地域住民の意識改革を行うことにより、地域の子どもは地域で守るという意識を高めた。
- 地域の行政の理解が不可欠である。積極的に地域の行政が関与すれば、効率的に地域の防犯意識の高揚が図れると思う。

【事業担当課：警察本部生活安全企画課】

- 平成 18 年 7 月 14 日に「島根県犯罪のない安全で安心なまちづくり条例」が施行されたことに伴い、これからは県･市町村が一体となった取り組みが必要になってくる。市町村に協力していただきたい。

②「だれんもで　古代出雲神話村づくり」（事業報告　P30）

【実施団体：大社デザイン】

- 協働とは、互いのスキルの持ち寄りである。

【事業担当課：古代出雲歴史博物館】

- 協働事業の途中では必ずすれ違いが起こるが、組織と組織では解消できない。個人同士の信頼関係の醸成により壁を乗り越えられる。

（２）事例発表についての質疑・意見

①事業名「出東地域安心安全ステーション」

（質問）自分の地域でもしてみたい。学校側が当初協力的でなかったということであるが、どう対処されたのか？

（回答）かなりの苦労があった。「地域安全」「マップ作成の趣旨」「授業のなかでいかに組み入れるのか」「地域コミュニティは学校も参画するような動きがないと成り立たない」等、説明を重ねる中でご理解いただき、結果的には、うまく協働でき、授業にも取り入れてもらい、地域安全への方向性が出来たと思う

（質問）協働ということに対して、どういったイメージを抱いておられたのか。また、協働相手が果たして警察なのか。教委ではないのか。

（回答１）協働はわかりにくい。単にともに働くということではなく、何かひとつ思いを持った者が各々理解しながら助け合うことで、ひとつのものが成り立っていくイメージがあった。しかし、事業を実施していく中で、自分が変化していったことにびっくりした。最終的に子どもを守るということよりは、コミュニティをつくることが大事だということに気がついた。形としてマップが出来たが、実際の活動は、地域コミュニティが再生したことではなかったか。だとすれば、協働相手は防犯という

ことで警察であると思う。ただ、命を守るのは最終的に自分であるという教育も必要であると思う。

（回答２）テーマ設定部門は基本的にテーマ提出所属が事業担当課となる。

（意見）出東地域安心安全ステーションの取り組みは大変良いと思う。

（意見）出東の取り組みが興味深い。防犯から地域づくりに発展させられたところをもっとくわしく（苦労話）（問題点）お話をうかがいたかった。

②事業名「だれんもで　古代出雲神話村づくり」

（質問）古代出雲歴史博物館は、建物の維持も管理も大変だから、地域が協力して有意義に公開できればという話が聞けるかと思ったが、行政側の言い訳に終始したように聞こえた。

（回答）古代出雲歴史博物館については、さまざまな意見があることは承知している。施設は出来るが、サポートする仕組みがない。単に見て帰るだけの施設ではもったいないということと、地域振興に役立てるためには外へ出て、自治会の方といっしょにソフトを生み出して作り出していかねばならないという考えの基に事業を模索していた。県の協働事業の実施にあたり、いっしょに地域のために取り組んだ。実施にあたっては、出雲市の大社支所の職員にもご協力いただいた。

（意見）我々の事業は、高齢者の貢献のためにスタートした事業であるが、片方では建物でもお金を使い、この事業でもお金を使うのかという気がした。

（意見）大社デザインは、最初から、協働ということをきちんと考えて取り組んでおられたと思う。

（意見）大社の事例では、それぞれの人材特性をうまく活かして、効果を上げておられたと感じた。ただ、普通の行政職場では活かせる“スキル”があるのかと、反省を込めて感じている。

（３）県民との協働による島根づくり事業についての質疑・意見

（意見）アンケートの目的が事業の目的の記述はあったが、協働における目的も有るべきである。その評価もきちんと検討していく必要があると思う。

（質問）この事業は、提案者が手をあげるのか、県が団体に声をかけるのか。

（回答）県からの押しつけではなく、皆さんから提案していただくものである。

（意見）我々が聞きたいのは、反省材料である。

（意見）報告書は、本来なら、問題点を挙げてほしい。出来たら、書きにくい部分も表現するような報告書にしてほしい。

（意見）

●地域づくりの情熱はどの団体も持っている。この事業で最も刺激を受けたのは行政であろう。
アンケートのなかに県庁から来訪がなくて残念という意見があったが、遠い県庁より身近な地方機関をもっと利用すればいいというしたたかさが団体側にあっても良い。

●もっと具体的な事例をもとに、パネリスト無しでざっくばらんに参加団体と事業担当課が討論出来るような、事業参加者が克服したことや困っていることの意見を交わす場があってもいいのではないか。

●この事業は、県財政の逼迫化から出た苦肉の策であると理解しているが、困った時は良い知恵が出るもので、なかなかいい事業であると思う。

●協働の意義･定義についてはいろいろな解釈があり、それはそれで良いと思うが、原点では、まちづくりへの協働は、実施団体が行政の力を借りることでより大きい展開、大きい効果をあげることが出来るのではないかということで「県民との協働による島根づくり事業」は進んでいると思う。

●今後の課題としては、市町村の協力をいかに取り付けるかであると思う。地域の活動に地元自治体の協力がないとうまくいくはずがない。県や団体は、地元自治体をいかに巻き込むかを念頭に置いて努力する必要があるし、市町村も意見交換会等いろいろな方法でＮＰＯ等のノウハウを吸収していただきたい。

５．参加者アンケート意見

一般	●新しい島根づくりの出発点となる事業だと思う。 ●このような動きが、全県、全市町村、全国に拡がるよう期待している。
団体	●民の力と官の知恵を融合して、「島根県民」として地域おこしをしなければと、未来の展望に明るい希望をみつけた。 ●県と協働できるいい機会なので、今後も継続してほしい。 ●行政と団体側の定期的な情報交換の場があれば、その際に行政と団体側からの双方の想いと相談が寄せられ、その解決方法を相談しながら進めていくことが出来ると思う。 ●事業の活性化は、協働の環境づくりが勝負。行政、学校、民間団体等の一体化を推進するコーディネーターが必要と感じる。 ●「地域」ということを考えれば、県よりも市町村との協働に重点を置くべきだ。 ●今年度、事業を実施するが、協働という意味を再度考え、事業に取り組みたい。
行政	●採択までの透明性、事業終了後の検証をしっかり実施しておられるとともに、部署横断的に実施されるシステムが先駆的だと感じた。 ●県が望む協働は、民間の自立であり、民間の望む協働は行政の人間が流す汗（肉体労働だけではない）であると思う。評論家でなく、汗が流せる行政マンでありたいと改めて感じた。 ●民（NPO）と行政（県）のそれぞれの想いがマッチして始めて取り組めると思う。行政の想いが前に出すぎると、只の補助事業になるし、委託事業にまでおちてしまう。NPOの想いだけでは行政が関与する意味がないから、その想いを互いに理解するプロセスが必要と思う。 ●この検証会は重要な協働事業のひとつだと思う。 ●協働を実際に行った生の声を聴くことで、ぼんやりとしか理解できていなかった「協働」というものが少しわかった。とても有意義だった。 ●県民（事業主体）のためというより、県行政、県職員のための事業のように感じた。いかに行政を理解してもらえるか。県職員が刺激を受けて成長できるか・・今は、職務には直接関係ないが、有意義な時間だった。 ●実際に活動している人の生の声が聞けるのが良い。これからも生の声が聞ける検証会にしてほしい。 ●公務員として改めて考えさせられたことが多かった。柔軟な考え方が大切だと感じた。 ●「協働とは何か」確かに最近よく聞く言葉ですが難しい。